

—貧困の三角形—社会科学の概念—

人間は集団をなして生き、その集団の存続の中に自らの命を託する社会的存在でありながら、同時に生物的個体としての生命活動を営んでいる。

人間における自然（生物学）的な要求の欠乏を絶対的貧困と考えるとき、その最も過酷な状況である飢饉、飢餓が今なお起こる人間社会である。そして豊かな先進国の社会では、その社会の平均的な生活様式を送れないが故の剥奪、そこに引き起こされる人間感情があるとして、社会の平均的な生活様式を送る人々との比較によっておこる相対的貧困が指摘された。そして 21 世紀の今日、今や「社会的排除」と言う新しい貧困からの脱出、「社会的包摂」が先進諸国における政策課題となっている。

1. 社会科学の概念

① 統計的概念をへた抽象概念としての貧困概念

貧困概念の形成は、そのはじまりである絶対的貧困概念の形成過程において、すでに統計的な作業を通して進められ、ブースによる 1886-1902 年の貧困調査（ロンドン調査）は、「近代において、知を生産するために欠かせない方法論となった『測定』という技法¹」により、人間集団としての社会の状態、貧困を統計的研究で分析したものである。

経済統計学会の前身「経済統計研究会」の設立発起人で運営委員であった滋賀大学名誉教授故有田正三博士は、「社会科学的概念と統計的概念」において、いわゆるフランクフルト学派の所説の基本的特徴の一つである統計方法とその客体との間に間隙をおくという考え方について、「・・・社会現象を全体的・質的・意味的なものとし、統計的認識の論理的形式を客体とは独立に存立する、しかも本質的には数理とする所から来る。」としてさらに「方法と客体との矛盾！統計的認識は社会の本質的認識に対して彼岸に立つ。社会科学の認識と統計的認識の間における克服する事の出来ぬ間隙の設定は、しかし、『社会科学的要求にできるだけ一致する統計的結果』を獲得するための努力の断念を意味するものではなく、むしろこの努力の強化を訴えるものである²」との言をひいている。

抽象概念としての社会科学的概念と、社会現象としての具体的概念と、調査概念の間には間隙があり、それはいわば三角形が形成されると言うべきであり、その頂点は理想的にはこの三角形が一点に収斂する事だが、これは現実には望むべくもないので、その間隙が

¹ 小池利彦/平野亮「<測定>の社会学—ケトラーとブース（1）」P3
<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/81002084.pdf> 2012/2/01

² 有田正三
http://libdspace.biwako.shiga-u.ac.jp/dspace/bitstream/10441/3241/2/SJ21_0106_090Z.pdf P2 2012/02/01

可及的に少ない事が望まれ、その為の努力の道筋を求めている³としている。

この問題は貧困概念の形成過程においてその始まりから課せられた課題であろうと思われる。貧困問題は極めて規範的な問題でもあり、貧困実態調査、貧困概念形成過程において、具体的概念と調査概念との間隙を検討することにならざるを得ず、そしてその結果から抽象概念の構築がなされるに当たり、この間隙を前提にして行きつ戻りつこの三角形線上で逡巡、検討がなされざるを得なかったと思われる。

② 社会的に構築されつつある概念の規定

アイデンティ概念、そしてソーシャルワーク概念、社会的排除などは、定義困難と指摘されている。これらは現在進行形で社会的に構築の途上にあつて、概念の構成はその外延も、内部の構成要素、それらの関係性も流動的で、現在進行的に変化しつつある構築の途上にある概念ではないだろうか。

アイデンティティ概念に関して興味深い言及がある。「アイデンティティという用語の一般化に寄与したエリクソンは、定義的説明は試みず、アイデンティティがいかにより構築されるのかを理論的に検証するとしている。こうした方法を採用する事でしばしば陥りがちな論点拡散を回避し、アイデンティ概念が有する特質を理解する一助となり得るのでは・・・⁴」としている。

このような概念規定の困難さこそが、これらの概念の特性を表しているとおもわれ、おそらく近代以降、プロテスタンティズムの興隆以降の「熱い社会⁵」の時間の推移の中で、現在進行形で構築されつつある概念なのではないだろうか。

もっとも巷間流布した感のある「熱い社会」について、レヴィ＝ストロース自身はこの言葉は必要な理論的観念装置であり、限界事例を考えているのであつて、絶対的に熱い、あるいは絶対的に冷たい社会はどこにも存在しない⁶、熱冷どちらかの両端に位置する社会はどこにも存在しないと説明している。

ところでソーシャルワークの概念規定について、国際ソーシャルワーカー協会は「ソーシャルワーク専門職……人権と社会正義の原理は、ソーシャルワークの拠り所とする基盤である。」とソーシャルワークを定義し、この永い定義の後4項の説明に加え、*(注)として「21世紀のソーシャルワ

³ 有田正三

http://libdspace.biwako.shiga-u.ac.jp/dspace/bitstream/10441/3241/2/SJ21_0106_090Z.pdf P7 2014/02/01

⁴ 吉野良子 http://daigakuin.soka.ac.jp/assets/files/pdf/major/kiyou/17_syakai1.pdf P2 2013/04/29

⁵ レヴィ＝ストロース／エリボン 『遠近の回想』 P225 みすず書房 1991年12月

⁶ レヴィ＝ストロース／エリボン 『遠近の回想』 P225 みすず書房 1991年12月

クは、動的で発展的であり、従って、どんな定義によっても、余すところなくすべてを言いつくすことはできないといってよいであろう。」としている。どのように規定し、定義しても、こぼれる落ちる所が生じて言足りないと言った感の残る、それがソーシャルワークの概念規定である。

このような概念はその特徴を列記して規定し、そこから帰納的に外延を示し、この概念を緻密に規定するという本質主義的な論理構成が困難な概念ではないのだろうか。それを求めると各側面の緻密化が要請されるので、それぞれの側面のあわいが捨象され、概念がやせ細り、概念の全体像から乖離すると言った事を引き起こすのではないだろうか。

新しい貧困「社会的排除概念」も、各機関は統計的作業を重ねて、さまざまに調査概念、具体的概念、社会科学的抽象概念に接近し、概念構築の努力を重ねているところかと思われる。その経過を経て、今社会的に構築されつつある社会問題としての「社会的排除」は、その定義が定まってゆくのであろうと思われる。

③ 概念の重なり合い、隣接する概念との関係

ひとつの概念の定義をする場合は、現実の具体的な事象に対して、ある切り口で分け入って、法則性、傾向性を整理し秩序づけつつ、概念付けを行おうとする事になると思われる。アプローチする切り口、当該概念の使用目的（社会的意味、機能）また事象内部の複層性などにより、その概念は抽象概念として、独立的に概念枠を囲うのであろうが、その概念枠は、それぞれ孤高を保つと言う構成であろうか。

厚生主義的な効用（厚生）概念は物や社会状態などから得られる人間の満足感として定義され、厚生経済学においては貧困や不平等を「効用の少なさ」として測ろうとする。これが厚生経済学的な貧困へのアプローチの手法である。数理的アプローチなので、効用には様々な条件を付して、この条件をクリアできる狭い範囲での妥当性を追いながら概念を枠づけていると言えよう。

一般的には、社会の多様な構成と動的な広がりの中から、一定のまとまった事象をとりあげて概念枠をくくろうとする場合、効用以外の切り口も多数想定され、多様な切り口からアプローチされ得るさまざまな事象は、一定の概念枠でくくられつつも、近接した概念に囲まれている。

近接する概念同士は相互に影響を及ぼす循環関係、一部重なり合う、あるいは下位概念などもあって、概念相互は入り組まざるを得ないと思われ、自身の中に別の概念が含まれている「入れ子」を抱えるなど、概念相互は入り組まざるを得ないと思われる。自身の中に「入れ子」状態に別の概念を抱えている、たとえば「貧困」は「不平等問題」を「入れ子」のように抱えていると考えられる。

また一つの概念を規定する事実関係の様々は、効用ばかりではなく他の要因に影響を受けている。そのためそれぞれ事実関係を拾い上げて概念枠に沿って整理しようとしても、個々の事実関係同士が、分けられた塊として存在しているとも言えない事が多く、実際には分けする事は難しいのではないだろうか。

個々の事実群は、共通の要因から影響を受ける事象を抱えているなど、分けしようとしても互いに重なり合いを有していて、ジグソーパズルをはめ込みむように平面的な広がりの中に隙間なく概念枠を埋め尽くして全体を覆うといった事は現出し難いのではないだろうか。互いに重なり合い、共通な部分を抱えあった構成要素が、互いに膨らみあって交わり、重なり、あるいはずれ込みのような部分を抱えていると考えられる。

このような概念枠の弾力性、三次元的な膨らみと言う事を想定すると、アマルティアセンの貧困や不平等問題における、複数の社会的厚生関数の順位付けにおける、準順位と言う考え方も、その妥当性は説明できるのではないだろうか。

言い換えると、その概念自体が本質主義的に個別、個別に意味をなしているというよりは、そのような概念枠でくくられる事象は、むしろ隣接概念を構成する事象、あるいは対概念や反対概念との関係性の中に、その社会的な意味、輪郭が浮かび上がると思われる。

(伝統的な社会学が「しばしば、それを少数上げて強調すればそれですむとしているような、有名な例外主義⁷」は、ジグソーパズルのように概念をイメージするのであろうか。)

社会科学的な概念は、その概念自体において概念を緻密に積み重ねて完結できるというよりは、むしろ他概念との関係において概念の輪郭、その構造、内容が顕かにされていくのではないだろうか。神話論理の解明は他種族の神話との比較対照によって換喩、暗喩関係が顕かにされ、神話の意味する事が顕かにされると言う分析手法が採られている。

その概念の肉付きの具合、あるいは背骨さえもが、他の概念との関係によって、対比や、差異を通してより顕かにされていくのではないだろうか。特にルネッサンス以降、プロテスタンティズム興隆以降に巻き起こった自由、人権、平等などの抽象概念にあっては、社会的存在としての他者のそれとの相対する関係を通した時に、その外延、構成が明確化されうるのではないだろうか。

人権なども時代とともに新しい人権が構成されている。さまざまな他者の人権や自由との関係、隣接概念(人権、抑圧、平等など)との関係からその外延、社会的意味が、顕かにされると言う事なのではないだろうか。 一貧困の三角形を描くへ続く一

⁷ クロード・レヴィ=ストロース 監訳 馬淵東一・田島節夫『親族の基本構造(上)』P64